

30^h
anniversary
発行30周年

乾麺の30年を振り返る



逆風にも堅調維持

平成後期に底打つも安定続く

「乾麺・めんつゆグラフ」は1993年(平成5年)に発刊、今年に30周年を迎えた。平成から令和へ、その間の乾麺市場は大きく様変わりした。生産量は93年当時26万3千190t(そば粉を除く)あったが、22年には19万5千558tと約8万tが消失した。機械麺が大幅に減り、手延べ麺は生産者減の影響が顕著に現れた。しかし平成後期以降は下降線が止まり、横ばいが続く。乾麺市場にとってこの30年間はどんな時代だったのだろうか。振り返る。

平成初期(1993～1997年)

押し寄せる構造変化の波

「乾麺・めんつゆグラフ」を発刊した1993年は、乾麺市場は下降線の真つただ中にあった。

そのおよそ10年前の84年(昭和60年)には総生産量約30万tがあった市場が、89年(平成元年)までの4年間で3万tが減少。周辺市場の生めんや冷凍、即席めんなど麺類だけでなく、この頃、急に台頭してきた中食や簡便食品の影響を受けて、乾麺市場は急激に下降した。業界を取り巻く、構造上の問題が押し寄せた形だ。

機械麺の生産量推移をみると24

万7千800tから、20万1千tへ、4万7千t急落した。当時の業界大手の工場生産のキャバが4千tだったことから、11社が消えたのと同様の意味をもつ。手延べそうめんがギフトから市販用メインに移り、勢いを増しながら従来の西日本中心から全国区へと市場を拡大。機械製のそうめんとひやむぎはその煽りを食らった。

機械麺の苦戦に反比例するかのようになり、手延べ(ひやむぎ、うどんを含む)生産量は、その間に54%飛躍した。このころの傾向としては手延べうどんの伸び率が著しく、「揖保乃糸」でも昭和62年度産から、78年ぶりとなる手延べうどん